

ワンダフル空手 29 話

正月から厳寒の日が続いている。昨年の暮れに雪が降った。

それも半端な降り方ではなく、本格的に降った。

前にも書いたがアラバマは雪が降るとすべてが止まってしまう。

アラバマだけでなく南部一带の生活の歯車が止まってしまうようだ。

それが新年になってまだ一週間なのに、また雪が降った。

鏡開きも終わったのだが、天候には勝てない、道場も3日間お休みである。

10年一度の割合で降るならともかく一カ月に二度も降られると綺麗だ、風流だ・・・などと言ってられない。いい加減にしろである。

・・・新年から泣きが入ってはいけない。先が思いやられる。

窓から外を見ると、銀世界である。綺麗だが全てが凍てついているように見える。

散歩にでるか、どうしようか迷っていると家人が「あら綺麗ね～、散歩に行くんでしょ、私も付き合うは」である。と言う訳で気合を入れて雪の中散歩に出かける。

そとに一步でたとたん顔が凍ってしまった。

家人と愛犬のハナは、ハシヤイデいるが私は押忍の二文字で右左と黙して歩く。

歩きながらワンダフル空手の事を考えた。

最近筆不精である。ちょっと自分に気合を入れないといけない。



話を45年前に戻す。

なんでもそうだが、環境が変わると生活の拍子、テンポが変わる。

その環境の生活に慣れるまでいろいろな葛藤が生まれる。

何度も言うようだが45年前はまだバーミンガムはホント田舎な感じがした。

ちょうどあの頃はカラテの熱が世界中に燃え始めた時期である。

どの流派の道場でも毎日のように稽古があったように思う。

ところがここバーミンガムでは、稽古時間は夜、それも週三回、なんとかロンやMR ガーウック氏を説得して土曜日の朝稽古時間を設けたが、時間をもてあました。

東京やNYと違ってここは全くの田舎静かである。私には静か過ぎるのである。

東京の真中、文京区小石川の生まれ、幼稚園から明治大学まで東京で過ごした私にはここはまさに陸の孤島であった。まったく生活のテンポが狂った。

毎日が平和で、のどか過ぎるのである。

ここに着いたときは眼を三角、四角にして額に縦皺をつくり肩張って歩いた。

一カ月過ぎるうちに道場の指導も軌道に乗り、他流派の連中との関係も落ち着いた。

名前も売れて道場も毎日のように入門者がある。関係者の人もホクホクである。

平穏になり、気を張り、肩を怒らし、額に縦ジワ作らなくても良くなった。

しかし一段落して、気の張った生活が終わると、なぜか急に時間をもてあました。

45年前、インターネット、スマートフォンなど夢にも思わなかった。

部屋の電話、一昔風の黒色の指で番号を回す、アンティークな品物である。

いまの若い人は、きっと「マジ！ エッ、ウソ～！・・・」と声を漏らす代物である。

それに国際電話はべらぼうに高かった。そんなお金などある訳がない。

だから手紙を書いた。誤字、脱字など気にしてられない。

ここにきて知ってる限りの友人に手紙を書いた。

相手は私のことなどきっと忘れてるような関係の人にも手紙を出したように思う。

返事はまだか、まだかと毎日エキサイトして郵便箱に通う。

それも一日に何度も。郵便屋さんは一日二回しか来ないが、もしかして速達が来るかもなどとバカな期待をもった。

それまであまり本も読まなかったが、持ってきた雑誌、本を何度も繰り返し読んだ。

暗記するぐらい読んだ。

友人から待ちに待った手紙が来ると感激しながら何度も何度も繰り返し読んだ。

どこに行くにも持ち歩いた。手紙の内容が“元気ですか？僕は元気です・・・”のような簡単なものでも、その行間から懐かしい日本の香りがするようで離せなかった。

便所の中まで持って行って読んで。もちろん夜寝る前にも又読み直す。

そんな感じで気持ちが揺れ揺れだったが、自分の稽古は毎日欠かさずこなした。

あの頃の日課は朝のランニングから始まった。

朝と言っても、いつもベットから起きるのは10時近かった。

ちなみにあの頃は雪など降らなかった。

ランニングを終えると、裏庭の隅にある大きな松の木にブランケットを巻き付けた手製の巻き藁バッグに突きや蹴りを出す。

コンビネーションを稽古しながらクラスの指導内容、生徒の癖を考えたりした。最後は軽く柔軟をこなし、それからシャワーを取る。後はコーヒータイムである。私の部屋の前にはピクニックテーブルがあった。

ときどきそこで簡単な朝食をとる。おもにトースト、目玉焼きである。

その後は“フ〜ン”とため息を付きながら、ボケ〜ッとし、想いが日本にとぶ。

友人や後輩のことを「今頃どうしているのかな〜」と想像をする。

そんなある日、私が座っているテーブルの端に一匹のスクワロー {SQUIRREL リス} がそろそろと上がってきた。

くりくりした愛らしい眼で、じいっと私を見つめる。私も見つめる。断っておく。

そのリスがオスカメスカ全くわからない。いまでもわからない。

長閑であり時間は充分ある。そこでパンの切れはしをポンと投げてみた。

リスがそのパンと私を見比べながら様子を窺っている。動かない。

“オッ” 殺気を感じるのか? と思って、私がリスから視線を外し気をそらす。

それでもリスは動かない、ただじっと注意深くパンの切れはしと私を見ている。

ヨシ、と私が立ち上ってベンチから2〜3歩はなれる。

その拍子に、さっと動いてパンの切れはしを持って近くの木に飛びついていった。

オッ、これは面白い、何とかこのリスを手なづけようと思った。

有り余った時間の中、リスとの交流は退屈していた生活に活気をもたらした。

グロスリーストアに行ってピーナツを買った。本格的にやろうと思ったわけである。

次の日からピクニックテーブルに今度はピーナツを4〜5粒おいた。

パンのかけらよりピーナツの方が魅力があったようである。

私がベンチの端に座っていても逃げないでソロリソロリとピーナツをとりにくる。

なんとかもっと手なづけ様と思い、2〜3日後に今度はピーナツを左掌に載せた。

なんとなく信用できなかつたので、用心のため右手に細い木の枝をもった。

そ〜っと、近かづき、私の掌から一つ両手でつまみかじりだした。

愛くるしいスタイルに思わず気が緩み、思わず左手を引いてしまった。

その途端、“キッ” と声を出しながら、このリス爪を立てたのである。

「イテ〜、この野郎」と右手の木の枝でリスの頭をポンと叩く。

一瞬眼が回ったのか、ボケ〜とベンチの上でフラフラした。ホント可愛かった。

それから私を見てなにすんだ! とは言わなかつたが「キッ、キッ・・・」何か言ってきた。「キッキ、キッキ」である。リス言葉もちろん私はわからない。

そこで右手の小枝を振る。お互いに睨み合う。

たぶん睨むより、見つめ合った・・・と言った方が表現として正しいようである。

私が手を動かしたのでこのリス本能的に爪を立てたようである。

私が左手を動かさなければ全て無事だったようである。その事に気が付いた。

それからはしばらく私とリスの友情は日ごと深まっていったのである。

私の掌からピーナツを取るときも、なんの怯えも見せなくなった。

頭を触ってもただひたすらにピーナツをかじっている。

太郎と名前も付けた。ところが二人の平和の日は続かなかつた。

暫くすると太郎に敵が現れた。太郎は身体が大きくない。

周りの大きな身体のリスが太郎が降りてくると後を追って周りに寄っているのである。太郎がピーナツを取るとそれを奪いだす。そこで私が木の枝をもって太郎を守る。

太郎との友情はさらに深まっていったようである。

私が他のリスを追い回すのを見て太郎は「キッ、キッ・・・」と笑っているのか、それとも「やれ～、やれ～」とけしかけて居るのか、その辺は分からない。

ただ腰を落ち着けて悠々とピーナツを食べている。

太郎との時間は朝の楽しみになった。

俺はもしかして動物園でも働けるかもしれない、・・・と思ったかどうか忘れた。

ところがウイー~~ク~~エンドはちょっと違った。

金曜、土曜日はロン夫婦が必ずと言っていいほどパーティーに私を連れて行った。

当然帰りも遅くなる。次の朝も遅くなる。

ある朝、朝と言うより殆ど昼に近かった。

窓に「ガーン、ガーン」と何かがぶつかる音がした。

なんだと思ってカーテンを開けると、窓の網戸に太郎が飛びついているのである。

「お前ね～」と思わず呟いたかどうかは忘れた。ただ呆れたことは確かのようにである。

太郎が私が起きないので催促してきたのである。両手両脚で窓の網戸に懸命に捕まって「キッキッ、オイ俺のピーナツどうしたんだヨ！・・・」こんな感じである。

ふざけるな～、と思ってカーテンを閉める。

また「ガーン、ガーン」を音がする。窓の網戸が壊れてしまう。

仕方がないのでピーナツの袋をもって外に出る。

ドアを開けると、私の足元に太郎が立ち上って「キッキッ・・・」である。

まいった。なんか太郎に惚れられたようである。

土曜日など稽古が終わって、ロンに送られて帰ってくると、太郎が木の上からザぁ～と音をたてて降りてくる。ロンが傍にいたので途中で止まる。

じっと様子を見るわけである。

ロンに太郎の話をするとうれいしながら「極真空手はリスも指導するのか、師範ベットが二つあるんだから一つは太郎にやれば」と冗談を言い出した。

太郎との友情は半年以上続いたようである。

その後、私が別な下宿に移るとき、ロンや他の門下生が「太郎も連れて行けば」と言ったがそこまで太郎の面倒はみれなかった。太郎との出会いはいい思い出になった。

リスの太郎の話はここまで、カラテの話にもどす。

私の体重はあこのころ約60キロ {132ポンド} ぐらいだった。

アメリカについて最初に思ったのは自分の体重が少ない事であった。

こちらの人間は大きかった。背も高く、胸の厚さも半端じゃない、果たして俺の正拳で叩いて効くのか・・・不安になり頭が痛くなった。

正直に言って焦った。何とか自分のウエイトを増やさないといけないと真剣に思った。

「兄貴に負けないように俺も極真カラテを広めるんだ」と使命感で燃えていた。

そんな気負いと、気合が私の身体を包んでいた。

しかし眼の前の大きいアメリカ人と私の身体を比較すると、不安と言うか焦りに似た気持ちが心の隅に感じられた。気合だけではどうしようもない。

もっと、もっとと技や動きを磨き、練り上げないといけないと真剣に思った。

続く